

障がい者スポーツに関わる取組みについて

2016年11月11日

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社

MS&AD INSURANCE GROUP

経営企画部

1. 障がい者スポーツ推進に関連する取組み内容について

◆弊社取組み事項（2016年度）

- ①アスリート雇用の実施（障がい者選手、健常者選手）
- ②社員研修に障がい者スポーツ支援の講座を設置
- ③全国各地で障がい者スポーツに関する社内イベントの開催
- ④全国で障がい者スポーツ大会への社員応援の実施
- ⑤地域の障がい者スポーツ大会での運営ボランティアの実施
- ⑥雇用した障がい者アスリートの大会出場の応援
- ⑦雇用した障がい者アスリートのリオ・パラリンピック出場、壮行会の実施
- ⑧リオ・パラリンピックでの応援
- ⑨社内アスリート懇談会の開催（一般社員との双方向コミュニケーション構築）
- ⑩障がい者スポーツ関連団体への協賛
- ⑪自治体と連携したアスリートの練習環境づくり
- ⑫障がい者スポーツwebサイト、facebook、ポスター等による発信
- ⑬障がい者スポーツ大会応援時のグッズ作成
- ⑭障がい者スポーツ関連団体、自治体等と連携したイベント実施（講演活動等）
- ⑮障がい者スポーツ関連団体への人材派遣
- ⑯大阪実業団駅伝大会の主催、障がい者社員の参加

◆キャッチコピー

「AD Challenge Support」

- ・ADは弊社社名の略語
- ・障がい者スポーツに関わる人たちを広く応援する意味を込めて命名
- ・チラシ、ポスターへの記載、当社障がい者スポーツ支援webサイトの名称

◆標語

「観て、感じて、考える」

- ・当社障がい者スポーツ支援の取組みの柱である大会応援を促す際の共通標語として社内で使用。
- ・まずは、大会の現場を観ることが大事であるとの考えから始まることを伝えるための標語。



障がい者スポーツ
応援サイト

ADチャレンジ

検索



①アスリート雇用の実施（障がい者選手、健常者選手）

（１）取組み内容

- 2014年度に障がい者スポーツ選手向けの採用制度を構築しました。当初方針は、いわゆるトップアスリートではなく、国内大会を目標に地域で活躍する選手を対象とした採用としています。理由は2つあり、1つは弊社の行動基準が地域密着であること、もう1つは引退後も弊社で働きたいという希望を叶えるという理由に基づいています。
- 現在、9名の選手が在籍（2016年度4名、2015年度2名、2014年度以前3名）しています。8選手の競技内訳は、知的障がい者卓球、車椅子ダンス、ウィルチェアラグビー、デフサッカー、知的障がい水泳、身体障がい水泳、身体障がい陸上です。
- 2014年以前入社の社員は2015年度にアスリート雇用枠に変更しています。
- 2016年4月に、新卒で女子サッカー選手（健常者／ジェフユ市原所属）1名を採用し、障がい者・健常者の壁のない企業の具現化に向けた対応をしています。
- 2016年10月現在、2017年4月入社のアスリート（新卒）は3名内定しています。

（２）きっかけ

- 弊社は国内営業拠点（課支社）447店舗、サービス拠点（SC・SO）207店舗あり、各地で障がい者雇用をすすめてきました。10年前（2006年）から一般社団法人日本車椅子バスケットボール連盟の支援を始めましたが、障がい者選手の採用を積極的に行っていなかったのが実情です。社内には障がい者選手は数名いましたが、選手枠で採用しておらず、戦績を出した選手がいたことから当該選手が在籍していたことが判明し、このままでは人材自体も埋もれてしまうことを憂慮して、アスリート雇用制度を構築しました。
- 2004年にアスリート雇用制度を構築、2015年より本格的に採用を行い、今年度4名を採用し、2017年4月入社3名を内定しています。

（３）運用上の特徴

- 選手雇用の制度を構築し、業務を遂行しながらも練習・合宿・遠征・試合等に出やすい環境をつくるようにしています。それには制度のみでなく、職場の理解が重要であることからメンバーとのコミュニケーションを重要視しています。
- 弊社に在籍する選手の顔、名前、競技種目を知らない社員も多いため、障がい者スポーツ支援ウェブサイトやウェブ社内報でインフォメーションを行っています。
- また、大会応援の際には、競技説明用チラシを作成・配布し、理解促進を図っています。

（４）実績

- （2016年度）アスリート雇用枠 4名採用、3名内々定 ※2016年10月現在
- （2015年度）アスリート雇用枠 2名採用
- （2014年度）アスリート雇用制度立上げ

②社員研修に障がい者スポーツ支援の講座を設置

(1) 取組み内容

- 2014年度に、社員研修に障がい者スポーツ支援に関する講義を設置することを人事部と関連部にて検討し、次年度以降の新入社員研修に盛り込むこととしました。
- 対象となる新入社員は、2015年度約550名、2016年度約500名。
- カリキュラムは1年間に3ステップ式で構成しています。
 - 第1回 4月 講義（座学）経営企画部+パラ選手 狙い：障がい者スポーツを知る
 - 第2回 5-9月（実習）大会の応援参加 狙い：「観る」「感じる」「考える」
 - 第3回 11月 講義（座学）経営企画部 狙い：なぜ当社は障がい者スポーツ支援を行うのかを議論
- 第3回目の研修では、これまでを振り返り、「何を感じて、何を考えたか」、および「なぜ当社は障がい者スポーツを支援するのか」をグループディスカッションし、意見を出し合うことを主眼としています。
- 毎回活発な意見が出、新入社員ならではの感性を持った意見には、次の取組みにつながるヒントがあるので、この研修を大事に育てていきたいと考えています。

(2) きっかけ

- 当初、企画段階では、新任管理職研修で実施することを想定していましたが、若い社員に対し、感性豊かな時期に、「意識を変える」、「共生社会の理解を深める」、「当社アスリートを応援する」といったことを伝えていくことが、会社を変えることにつながると、考え方を改めました。そこで、新入社員研修に導入することとしました。
- 弊社の障がい者スポーツ支援の根幹は、まず現場を観ること、大会を観ることです。
「感じたこと、考えたこと」を「自分の生き方、仕事にいかにか活かす」といったことを社員が考える場をつくりたいと発想し、1年間で3回研修するというシナリオを考えました。

(3) 運用上の特徴

- 社員研修の担当部（人事部）との折衝からスタートしましたが、障がい者スポーツを通じて人間力を養えることを共通認識できたことで、当該研修の具現化に至りました。
- 新入社員に何を訴求したいのか、新入社員がそれぞれの職場に持ち帰って何ができるのかという点を考えながら講義内容を検討しました。講義は単なる座学でなく、スライド・動画・クイズなどを用いたり、グループディスカッションを行ったり、興味の沸く仕掛けとしています。
- 結果的に、アンケート結果をみると、新入社員ほぼ全員が理解を示し、自分のできることから着実に取組みをしたいという意見が総意のようでした。

(4) 実績

- （2016年度）3回1クール実施 対象：新入社員500名
- （2015年度）3回1クール実施 対象：新入写真550名
- （2014年度）企画検討開始



③全国各地で障がい者スポーツに関する社内イベントの開催

(1) 取組み内容

◆感謝の集い（県別開催）

○弊社では全国の支店（県）単位で地元企業のビジネス活性化、マーケティング活動等を支援するプラットフォームを有しています。このプラットフォームを活用して、2014年度より、障がい者スポーツの理解促進活動を実施しています。

○具体的には、「パラリンピアン講演」・「写真パネル展示」・「DVD上映」・「体験会」など、障がい者スポーツのコンテンツを各地域の皆さまにインフォメーションを行っています。

◆ファミリーデー

○社員の家族を会社に招く「本社ファミリーデー」を年1回開催しています。昨年度のブラインドサッカー体験会に続き、今年度は車椅子バスケットボールの体験会を開催しました。

・参加者は親子1組で、2015年度140組、2016年度150組でした。

◆社員向け体験会

○今年度、提携企業である日本生命社に声掛けして、両社コラボの体験会を弊社にて実施しました。日本ブラインドサッカー協会にお願いしてofftimeワークショップを行い、参加50名がチームビルディングを体感し、コミュニケーションの重要性を学ぶ機会となりました。

(2) 実績

	＜「感謝の集い」開催数＞	＜ファミリーデー参加数＞	＜社員体験会＞
(2016年度)	全国9ヶ所（10月現在）	親子150組	○
(2015年度)	全国18ヶ所	親子140組	—
(2014年度)	全国26ヶ所	—	—



④全国で「障がい者スポーツ大会」への社員応援の実施

(1) 取組み内容

- 障がい者スポーツを観たことがない社員が多く、まずは現場に赴き、障がい者スポーツ大会を観戦することを変えず推奨しています。テーマは「観て、感じて、考える」です。
- 観戦すると誰もが驚きを感じるはずですが、驚きだけで終わらせることなく、その裏側にある選手の生き方や考え方を知る努力をし、自らの生き方や仕事を見つめ直す契機にすることを期待しています。
- ジャパンパラ競技会、車椅子バスケットボール大会、弊社社員選手が出場する大会を中心に応援を募ります。社内イントラ、ウェブサイト「AD Challenge Support」、壁貼ポスター等を通じて案内し、参加申込みはイントラ入力のみで経営企画部で一元管理しています。
- 参加申込みが確定した時点で参加者には当日の案内、競技の説明などを送付しています。社員選手が大会に出場する場合には、応援席にて当該社員を紹介し、近い存在であることを印象付けつつ応援者を増やす努力をしています。
- 大会応援終了後には、参加者にアンケートをとり、満足度・要望・改善点などを記載させ、KPI指標に反映するとともに今後の取組みに反映するようにしています。

(2) きっかけ

- 10年前（2006年）から支援している車椅子バスケットボールについては、長らく、担当部の一部社員のみが大会に応援へ行くといったものでした。2014年度より本格的に障がい者スポーツ支援を行うこととなりましたが、当初は会場も関係者のみで疎らでした。
- 弊社社員が観戦することで疎らな観客席を埋め、盛り上げ、「パラリンピック等の大きな大会に出場する選手のために役立ちたい」「広く障がい者スポーツを知らせたい」という願いが取り組んだきっかけです

(3) 運用上の特徴

- 弊社は全国に拠点があり、各地域で社員が障がい者スポーツ大会を観戦するのが理想ですが、すべての大会を網羅することができないため、地方開催の場合には当方から現地に能動的に働きかけを行っています。また、県大会でも大会応援を実施し始め、本社・首都圏と地方との温度差をなくすよう努力しています。
- 首都圏で開催される大会は、平均150名ほどの社員が参加、地方での開催の場合は、現地の社員に声掛けし平均60～80名が応援観戦しています。
- 応援観戦終了後、参加者全員に社内メールにてアンケートを実施し、「何を感じたか」「弊社の取組みをどのように思うか」など回答を求めています（回答返却率約90%）。

(4) 実績

- （2016年度）参加 841名 11大会
※2016年10月現在
- （2015年度）参加 1,020名 8大会
- （2014年度）参加 456名



⑤地域の障がい者スポーツ大会での運営ボランティアの実施

(1) 取組み内容

- 2015年度より、障がい者スポーツの現場を観ることを推奨していますが、大会を観戦すること以外に、全国各地の大会の運営ボランティアを行うことも推奨しています。
- 参加対象は、地域の営業支社、サービスセンターとしています。
- とりわけ、県障がい者スポーツ大会（県大会）での運営ボランティアを柱に組み込んでいます。ジャパンパラなどの全国大会と比較すると、いまだに関係者しかいない状況で人手不足が悩みのようです。
- 社内イントラにて公募し、手を挙げた職場に経営企画部から直接連絡をします。
現地の職場から県大会事務局に連絡をして、詳細を詰め、具体的なボランティア活動の内容を確定させます。

(2) きっかけ

- 弊社がオフィシャルパートナーとなっている日本障がい者スポーツ協会に聞いたところ、県大会こそ周囲の盛り上げが必要であるとの話を伺いました。
地域密着を掲げる弊社にはまさにうってつけであると考え、地方の件大会の実態を見たところ、本当に人手不足で観客もいない状況でした。
- そこで、全国展開している弊社の営業網を活用して、県大会の運営ボランティアにより、地域の障がい者スポーツを支える活動を開始しました。
- 地域で仕事をする社員と本社の写真との意識の温度差を埋めるためにも、まだまだ緒についたばかりですが、地域での活動を大事に育てていきたいと考えています。

(3) 運用上の特徴

- まず、経営企画部が県大会事務局と会話をし、コーディネーターとなります。
- 県大会の事務局に連絡する際、「保険は結構です」と言われる場合がありますが、多くの場合、県大会の事務局には喜んでいただけます。
その後、県大会の事務局と弊社現地の担当が上手くコミュニケーションをとれることが肝になると感じています。
- 弊社現地の想いと県大会事務局の希望がすれ違うケースが散見されます。そのような場合は、経営企画部の担当から県大会事務局に連絡し、現地との間を取り持つこともしばしばあります。
- 実際の大会での運営ボランティア活動は、選手に近く、臨場感があるため、社員からは次回も是非参加したいという声が90%にのぼっています。

(4) 実績

- （2016年度）5ヶ所（広島、新潟、愛知、高松、福岡）
その他、2ヶ所計画中 ※2016年10月現在
- （2015年度）4ヶ所（広島、鳥取、大阪、千葉）
- （2014年度）2ヶ所実施（トライアル） 近畿損サ、広島支店



⑨社内アスリート懇談会の設置（一般社員との双方向コミュニケーション構築）

（１）取り組み内容

○弊社９名の選手はいずれも個人競技であり、社内の応援ムーブメントをいかに構築するかを考えた時、一般社員の意識を変えることだけでなく、選手自身の意識も変える必要があると考え、2016年度より「アスリート懇談会」を設置しました。何もしなければ、選手の多くは受け身のまま過ごしてしまうと思われます。

○2～3ヶ月に１度、全選手が集い、社員・会社に応援してもらふ風土をいかにつくるかを基礎に、自分たちに何ができるかを考える場とし、双方向コミュニケーションを目指しています。

そのようなディスカッションをするほか、テーマを設けて強化に資する講習を実施しています。

- 第1回 5月：主旨説明、情報交換（各自の練習状況、強化の考え方等）
- 第2回 8月：競技者に必要な栄養・サプリメント（味の素様と連携）
- 第3回 12月：練習に必要な基礎知識（トレーニングの考え方等）

○現在、社内イベントや地域でのイベントに選手を登壇させるよう仕向け、選手の言葉で応援への感謝を伝えたり、自分たちへの期待を受けたり、近い距離感で社員・代理店との交流を図れるようになってきました。

（２）きっかけ

○選手は選手のロジックで、社員は社員のロジックで、それぞれの言い分や考え方があるため、根本的な相互理解が必要であろうと考えたのがきっかけです。応援してくれて当たり前でなく、そこには「感謝」であるとか「こうしてほしい」とか相互のメッセージと理解が伴うものであろうと思います。

○障がい者スポーツ支援の事務局としては、これまで社員向けにアプローチしていましたが、選手へのアプローチがなかったことに気づきました。選手から能動的に社員に対する働きかけをして、距離感を近くしながらメッセージを謙虚に伝え、双方向コミュニケーションを具現化するために「アスリート懇談会」を設置し、実施し始めました。

（３）運用上の特徴

○「アスリート懇談会」では、毎回、双方向コミュニケーションを実現するには、どのような場が考えられ、どのようなメッセージが求められるかを選手間で考えさせるようにしています。

○開催日は、約3～4時間を費やすようにしており、第1部では、双方向コミュニケーションを実現するために選手としての意識変革を促す場とし、第2部では、研修もしくは講習の場として競技者として興味のある強化に資するテーマで行うようにしています。

○各選手の所属長には業務の一環とするよう人事部より通知して全員出席としています。

（４）実績

○（2016年度）

第1回開催（5月）

第2回開催（8月）

第3回開催（12月予定）

第4回開催（2017年2月予定）

○（2015年度） 企画検討



⑭障がい者スポーツ関連団体、自治体等と連携したイベント実施（講演活動等）

（１）取組み内容

○2016年より、弊社と関わりのある障がい者スポーツ関連団体や自治体と連携して、会社として子ども向けイベントや広く社会に訴求するイベントに主体的に参画しています。

○2016年の具体事例は以下の通りです。

1) 渋谷区 子ども向けイベント（6月）

- 弊社アスリートがパネルディスカッションに登壇 - 自分の競技の体験会を実施

2) 千葉市 障がい者雇用促進イベント（9月）×2回

- パネルディスカッションに登壇

3) 渋谷区 イベント「超福祉展」（11月13日） ※「超福祉展」11/8～13開催

- シンポジウム「障害者スポーツの挑戦者たち」に登壇 @渋谷ヒカリエ 8階

4) 千葉市 商工会議所セミナー（12月19日）

- シンポジウム「障がい者アスリートの社会との関わりと雇用」に登壇 @千葉商工会議所

5) 目黒区 小学校への出前授業（2月予定）

- 弊社アスリートの講演、一緒に障がい者スポーツを経験、共生社会の授業

○今後は地域を広げて、地域密着で子ども向け出前授業を増加したいと考えています。

（２）きっかけ

○渋谷区は弊社本社所在地で、障がい者スポーツを支援している企業として認識いただくとともに弊社選手のリオ・パラリンピック出場を契機に、双方で協力して広く障がい者スポーツの機運を高めることを合意しました。

○千葉市は、弊社の取組みを知り、熊谷市長から直接お声がけいただき、障がい者スポーツを盛り上げるためにできることを一緒に行うこととしました。

○目黒区は、弊社リオ・パラリンピック出場選手の居住区であり、壮行会にお越しいただいたことが契機となり、弊社から出前授業を提案したところ教育委員会への働きかけを含めて快諾いただきました。

（３）運用上の特徴

○自治体の視点と企業の視点のすり合わせを十分行い、焦点がずれない領域で参画することを心がけています。

・また、企業色を強く出しすぎないように意識しています。一般市民からみた時に客観性が担保されるような参画の仕方を検討して協力しています。

純粋に地域に貢献する意識が大事であろうと考えています。



2. 取組みを行うこととなったきっかけ、取組みによるメリットについて

1. 取組みのきっかけ

2006年 日本車椅子バスケットボール連盟 日本代表 公式スポンサー



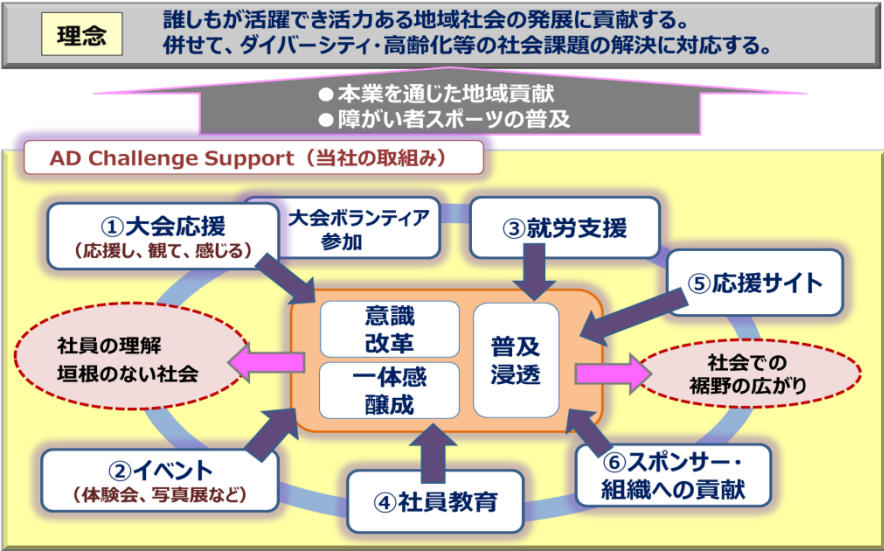
2013年 オリンピック・パラリンピック プロジェクト設置が決定

2014年 本格取組みスタート

(公財) 日本障がい者スポーツ協会 公式パートナー

2016年 (一社) 日本身体障がい者水泳連盟 公式スポンサー

2. 取組みの考え方 ★2020年のその先へ



3. 取組みによるメリット

2020年東京大会（≡国家事業）に貢献する

- ①弊社内の文化、レガシーを創る
 - ・社員の意識を変える≡会社を変える
 - ・障がい者スポーツを通じた共生社会の理解
 - ・地域に貢献する
- ②社内の一体感の醸成
- ③特徴ある会社づくり
- ④社員が明るく、元気になる

弊社にとって、
目に見えない経営課題に対峙する

3. 社会全体の取組みを拡大するために必要と考えられること

1. 各企業ができることを行う（＝すぐできること）

例えば、、

- ①大会の応援に行く
- ②自治体主催のイベントに行く
- ③ポスターを作成、社内に掲示する

2. 活動する企業を増やす

- 上記1. を具体的に実施する企業のすそ野を広げる

3. 業界団体を巻き込む

- 業界として取り組むことを依頼
 - 大会応援に行く
 - 統一ポスターを配布して各社に掲示する
- 活用事例として、
経団連オリンピック・パラリンピック等経済界協議会を通じて業界団体にアクションを起こす
↓
各企業ができる範囲のことを行動に移す
(注) 決して、難しいこと、背伸びすることはせず、身の丈でできることを検討

【商店街での事例】

全国の商店街に統一ポスター、統一のぼりなどを配布
津々浦々同じ意識レベルにするために有効
また、統一仕様であれば、アンブッシュマーケティングに抵触しない

4. セカンドロゴ等の使用を許可する

- 広く活動の輪を広げるために、統一ロゴ、ポスターなど使用できるツールを提供する
- ツール提供位より、2020東京大会への参画感が得られ、社内に浸透させやすい